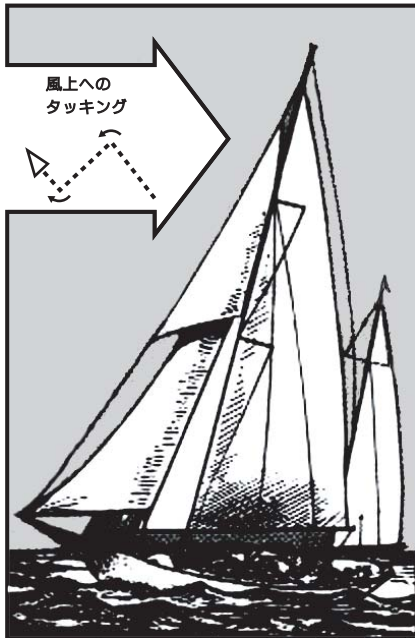


「漸進的な導き」という名の教理進化論 ー第3部 タッキングだまし

1982年3月1日号の「ものみの塔」誌に、「どうしてこうもコロコロと理解や教理が変わるのか」と感じていた人にとって、実に明快な記事が掲載されました。

多くのエホバの証人が「そうだったのか ものみのとう！」と感じたに違いないと後々語りぐさになるほどでした。その時の記事を振り返ってみたいと思います。



*** 塔 823/126,7 ページ 2,6 節 義なる者の進路は絶えず明るさを増してゆく ***

「一部の人にはその進路が必ずしも一直線でないように見えたかもしれません。エホバの見える組織が行なう説明が、以前の見解に調整を加えるもののように思えたことがあるかもしれません。しかし実際にはそうではありませんでした。このことは、航海の際の“タッキング”として知られる航法になぞらえることができるかもしれません。水夫は帆を操作することによって船を右から左へ、また前後に動かすことができますが、向かい風について常に目的地に向かって進みます。

光は漸進的に輝き出るため、また人間の不完全さと弱点に起因する誤りがあったため、これらのクリスチャンは様々な見解や教えの再評価を迫られたことがありました。」

「その進路が必ずしも一直線でない」

事実その通りですから、素直に認めています。

しかし、この表現も相当に歪曲されています。

「必ずしも」(国語辞典：[副]《「し」は副助詞、「も」は係助詞》打消しの語を伴って、必ず…というわけではない、…とは限らない、という気持ちを表す。)

では、「一直線ではなかったのか」それとも「一直線ではないとは限らない。つまり一直線であった」のどちらが事実なのでしょう。

「見えたかもしれません。」([かもしれない]断定はできないが、その可能性があることを表す。)

一直線ではないと見えたとは断定はできない。

という意味ですが、次に出て来る「タッキングの話からも判るとおり、事実は「必ずしも」ではなく、「明らかに」であり、「ある人にはそう見えたかも知れない」(誰にどう見えたか)という問題ではなく「一直線ではなかったというのが事実です」と述べないのは、とても正直な態度とは言えないのではないのでしょうか。

「以前の見解に調整を加えるもののように思えたことがあるかもしれません。」

以前の見解に調整を加えるもののように思えたとは断定できない？

「もののように思えた」という表現は「事実」を人の感じ方の問題にすり替えようとしているように思えます。誰がどう思ったか思わなかったのかではなく、「以前の見解に調整が」あったのか、なかったのか。という問題ではないのでしょうか。

しかし、ここまでは、それでも、できるだけぼやかそうとする、涙ぐましい、もしくは痛ましい程の言い分けですが、「しかし実際にはそうではありませんでした。」と、ここで一転、開き直って明らかな虚偽です。

「以前の見解に調整」などなかったと断言しています。

誰でも知っているように、エホバの証人の歴史は、「以前の見解の調整」で明け暮れています。

全ての解説で、「調整」が全くなかったものは一つとしてないと断言できるでしょう。

しかし、数節後で再び、「光は漸進的（ちよつとずつ）だった」がために、「人間が不完全である」がために、誤りがあった、とやっここで認めています。それでも、その責任は神とアダムにあるわけで、執筆している自分たちにあるとは言わない。やっここで認めてその責任は、どこの誰なのか分からない「これらのクリスチャン」にあるとされています。

タッキングとは

この「タッキング理論」によって、長年くすぶり続けた、「教理変転当惑議論」に終止符を打てる、見事な例えを思いついたと、狂喜乱舞したかも知れませんが、私はここで、この例えに大きな疑問を提示したいと思います。

タッキングとは風に対する帆走角度に対して採るセイリングの方法の一つですが、ここで疑問なのが、「目的地」と「風上の方向」の違いです。

風向きは、不安定で、めまぐるしく変わります。ヨットは、風向きに対応した操作で「目的地」に向かいます。

当然、風上に向かわなければならないことも、時に生じます。この時だけは「タッキング」が必要でしょう。

しかし、歴史の事実が示しているように、その当初、1870年代から、今日まで終始一貫、「理解の調整」の連続です。実際その「新しい理解」と言う教理の変更は、今信じている事が「古い真理」としていとも簡単に捨てられ片付けられてしまうことであるにも関わらず、不思議なことに、地域大会の呼び物の一つであり、エホバの証人たちから、熱烈歓迎されており、そうしたものがほとんどなかった大会は、期待はずれのもととして不評を買います。

さほどに、「教理変更」はエホバの証人の特色そのものであり、日常的、定常的に見られることです。分かり易く表現すればこんな具合です。

「以前にこのように出版しましたが、やっぱり違いました。実際はこうです。」

「あ、ちよつと違って本当はこうです。…ところが全く逆で、これが本当です。」

…だったのですが、新たな光があたったので、実はこれこそ真理です。

…と思いきや、ただ単にこれが聖書の述べる所です。…と言われてきましたが、何と！やはり昔に戻って、やっぱりこれで良かったのです。…しかし、現段階まで預言が成就してきた今、事態を見守らなければ、何とも言えません。」…etc.

つまり、これまでに常に、定常的にこの「タッキング」でやってきたということは、どういうわけか、常に風上に向かって船を進めてきたということです。

正にそう説明されています。「向かい風について常に目的地に向かって進みます」

どれほど風向きが変わろうと、「目的地」は常に風上であるということです。

或いは、どこに向かおうと、目的地とする方向に向かおうとすると、何故か常にその方向から、風が吹いてきたということかもしれません。そうでなければ、右-左-右-左を繰り返す続ける必要などなかったのです。

なぜ風は、そも完璧に終始一貫、目的地から吹かなければならなかったのでしょうか。
 ヨットはそもそも風を受けて進むものですから、向かい風が長く続くような場合出帆を見送ります。
 タッキングは向かい風でも、そちらの方向に進めるための言わば「苦肉の策」です。なぜならヨットは風そのものが唯一の推進力だからです。同じ風でも、助けにもなれば妨げにもなります。
 風は、なぜに「ものみの塔号」を後押しする風になることが一度もないのでしょうか。
 ところで、聖書中の「風」という語と「霊」という語は同じ単語です。
 [へ語:ルーアハ、ギ語:フネウマ] 出典例(風(フネウマ)はその望む所に吹き…(ヨハネ 3:8))
 「ものみの塔号」を動かしている風は、それをどこへ導こうとしているのでしょうか。

「漸進的」であろうとなかろうと「導き」は進路を「妨げ」ようとはとしないのではありませんか。
 まして、「忠実で思慮深い奴隷」というお墨付きを頂いた後であればなおのこと、その奴隷の本来の仕事そのものを後押しこそすれ、「押し戻そう」とはしないはずではないのでしょうか。
 ものみの塔が、唯一神が用いられる地上の「組織」であるなら、それを保護して大事に守り、その働きが順調に行くように助けられるのではないのでしょうか。

「異邦人の時」はすでに過去のものとなって、今や(少なくとも霊的な事柄に関しては)「異邦人に妨げられることなく」順風満帆の航海が保証されてもいいのではないのでしょうか。

※

※ 順風満帆(じゅんぷう-まんぱん)

物事がすべて順調に進行することのたとえ。追い風を帆いっぱいを受けて、船が軽快に進む意から。
 ▽「順風」は人や船が進む方向に吹く風。追い風のこと。「満帆」は帆をいっぱい張ること。

「順風」について、ものみの塔にこんな記事がありました。

*** 塔 95 10/1 32 ページ『順風なるものが存在しない』とき ***

『『目指すべき港を知らなければ、順風なるものは存在しない』。1世紀のローマの哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカが述べたとされるこの言葉は、人生の方向を定めるにはどうしても目標が必要であるという、長年認められてきた真理を確証しています。

しかし、当てどもなく漂うだけの人生を送る人は少なくありません。…そうした人々は、自分の態度が定まらないので、「風によって前へ運ばれたかと思うと、次の瞬間にはまた押し戻される」波のようになります。(ヤコブ 1:6,「フィリッパス訳」) そのような人にとって、「順風なるものは存在しない」のです。]

協会の出版物は、パウロの宣教旅行に関してこんなコメントを残しています。

*** 洞 - 1 926 ページ コス ***

「使徒パウロは西暦52年ごろ、2回目の宣教旅行の終わり近くにエフェソスからカエサレアへ航海した際、…パウロとルカの乗った船は「コスに直行し」ました。つまり、船は順風のもと、タッキングをせずに追い風を受けて帆走し、沿岸を南下する75キロほどの航海をしました。」

聖書中に見られる、逆の、「向かい風」に関する次の記述も興味深いものです。

「イエスは弟子たちを強いて舟に乗らせ、ベツサイダに向けて先に対岸に行かせ、その間にご自分は群衆を解散させた。…それから、向かい風のために彼らがこぐのに難儀させられているのをご覧になると、…イエスは海の上を歩いて彼らのほうに来られた。…そして、舟に上がって彼らと

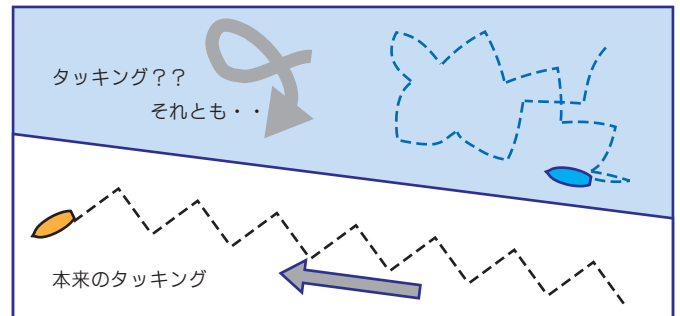
共になられた。すると、風は和らいだのである。それで、彼らは胸中に非常な驚きを感じた」
(マルコ 6:45 - 51)

常に「向かい風」のためにタッキングを強いられているヨット「ものみの塔号」にイエスが共に乗船しておられないのは確かです。

ところで、「タッキング」とは階段状にジグザグと、しかし方向的には、目指すべき所に向かいます。つまり「一直線ではありませんが「一方向に」進みます。しかし、ものみの塔の教理変更は、おおよそ、そうした表現で言えるようなものではありません。

『一部の人には、エホバの見える組織が行なう説明が、以前の見解に調整を加える、その進路が一直線でないのはタッキングという操舵方のように見えたかもしれません。しかし実際にはそうではありませんでした。』

一般的に、その実状をもう少し的確に表現する日本語があるのではないかという気がします。



次に二つのことばが挙げられていますが、特にこれと言った理由はありません。これをお読みになっている方の脳裏に何気なく浮かぶかも知れない言葉の意味を辞典からはっきりさせておくのに役立つかも知れないと思ったからに過ぎません。

「右往左往」とは

国語辞典：「混乱しうろたえて、右に行ったり左に行ったりすること。また、混乱して秩序がないたとえ。

もう少し分かり易いコメントを付け加えると、「目的はあるのだろうが、そのためにどう動いてどこへ行ったらいいのか判らない。右なのか左なのかもはっきりせず、「うろうろ」している状態。」

「迷走」とは

国語辞典：1 定まった道や予想される道を大きく外れて進むこと。「一する航空機」「一台風」
2 (比喩的に) 物事の進むべき方向が定まらず、結論がなかなか出ないこと。

指示書を無視して指示を待つ人々

ともかく、いつでも自分の居場所の正確な位置と、航路をちゃんと見定めるのは大事なことです。ところで自分の車で、自分で運転している分には、自分でハンドルが切れますが、乗り合いバスの場合そうもいきません。

「あれっ、運転手さん！ 今標識ありましたよね。確か進入禁止だったけど・・・。ねえ、運転手さん！ 道、間違っていないですか。確認してみた方がいいんじゃないですか！」

「もしもしっ。ちょっとあなた、何騒いでるんですか。他のお客さんに迷惑でしょ！」

「いや、でも道が・・・」

「あなたねえ。運転して下さっているのは、ちゃんとライセンスを受けたプロの方なんですよ。」

あなた、ただの乗客でしょう。フロに任せておけば大丈夫なんですよ。」

「そりゃ、そうでしょうけど、だけど標識が・・・」

「標識がどうしたんですか。 進入禁止？ それはあなたがそう思っただけじゃないんですか。見間違いか、じゃなきゃ、風で飛んできたやつが木に引っかかってたとか、そんなのに決まってるでしょ。 フロの運転手が何も問題ない、この道でいいって言ってるんだし」

「だけどフロだって絶対間違いや見落としをすることない、とは言えないじゃないですか。それに、聞いてみたら、あの運転手さん、これでいいんだ、間違いないって言ってる、後で違ってたということが数え切れない位あるって言うじゃないですか」

「それは確かにそうだけど、それであなたは何なんですか。警察じゃないでしょ。 もしあなたの言うことが正しくて、運転手が間違っているなら、いつか警察が正してくれるはずでしょ。 どうして警察を待てないんですか。」

「そりゃ、いつかは警察が扱う事にはなるでしょうけど、だからって、ちゃんと確認もしようとしなくて、このまま、間違ってるかも知れない道を走り続けるんですか。そもそも、「標識」は自分で直すために警察が供えたものじゃないんですか。 どうして警察のやっかいになるまで、放っておくべきで、自分たちで直すべきじゃないんですか。」

「ねえねえ、そこのあなた、そんなことあなたの心配することじゃないから」「そうそう、大丈夫だから」「気にしない、気にしない」「そうだよー そんなこと言っているとみんなが不安になるからさあ」

と、他の大勢の乗客に言われて、「ふーん そんなものですかね」とおとなしく座席に座るのでした。

およそ、2000年も昔から、誰にでも閲覧できるようになっている「指示書」があります。それをどのように使うべきですか。その答えも「指示書」に書いてあります。

「どうしてですか。なぜあなた方は、何が義にかなっているかをも自分で判断しないのですか」
(ルカ 12:56 - 57 新世界訳)

説得と納得の法則

手法としては、例えば会話の場合、相手に、言葉を挟む余地なくまくし立てる、文章なら、読者が「どうしてそういうことになるのかな？」と、最初のうち、感じて、取り敢えずそれは保留にして、読み進めてゆく中で、とにかく、ひたすら断定的に繰り返されている文章を読んでゆきます。

そして所々に、「明らかなこととして」「疑問の余地はありません」「疑えない事実です」などの言葉を挿入すると、「そんなもんなのかもしれない」と思わせることに成功します。

秘訣は、相手に考えてみる隙を与えないということです。

もちろんこのためには、それ以外にも様々な巧妙なテクニックが必要です。良く用いられているのが、論議と結論の結びつけ方の妙技です。

物事の正否、真偽を何も述べず、ただ、結論的なことだけを述べては、さすがに、多くの人は怪しむか、相手にしません。

ですから、あたかも当面の論議が、あらゆる可能性や証拠を公正に取り上げて精査しているという込み入った、時に専門的な引用文などを敢えて混ぜ込みながら、実際に誠実な調査と思える論議の後に、「ですから、〇〇はこうだと言えます」のような結論が導き出されています。

しかし、注意深く読んでみると、それらの長々とした論理と提出された結論は微妙に、時には甚

だしくずれている（ずらしてある）という手法で、まるで手品ののように、読者を感じさせることに成功します。

そして、これをより確実にさせるのが、「人の口に語らせる」という手法です。

「読書」では、やはり、自分のペースで読み、そして考える余地があります。また冷静に分析する環境があります。その人の周りには客観的な感想を述べる人々もいることでしょう。この「読書」の利点が、最大の敵、となります。そこで有用なのが、同じことを語る人、そしてできるだけ大勢の人々が口々に、異口同音に語るときに、礼儀正しい、にこやかな、さわやかな、自分の福祉に関心を払う、そうした人々に囲まれて耳にするとき「どうしてそう言えるのか」という、頭の隅に浮かんだ素朴な疑問は、急速に消えてゆきます。

普通の人なら「世間の常識」を誰でも身につけていますが、風習はその地方、地域で異なります。様々な価値観の違う身近な人々が口にする中で、共通している認識、価値観を自然に受け入れ、身につけてゆくと同じシステムです。

そしてもちろん、こうした機会、体験も頻繁であればあるほど効果的です。

およそ、週に2回、できれば3回くらい、一度に数時間くらい、「定期的」に施せば、まず完璧です。

さて、神の導きは「漸進的、「漸進的」、「漸進的」・・・」と、ことある毎に繰り返されるので、いつしか、そういうものなのだと思います。思い込まされてきた感があるこの言葉ですが、本当にそうなのかを確かめてみたことなどこれまで一度もなかったような気がしたので、改めて、調べてみることにしました。 まずその代表的な一節を引用してみましよう。

*** 塔 823/116 ページ 2,3 節『光が義なる者のためにきらめいた』***

「義なる者の進路に照る光の輝き方は漸進的であることに注目してください。それは『次第に明るく輝き』続けます。このことは、夜の明ける前に起きて、田園地帯を抜ける徒歩旅行を始める人の例えで説明できるでしょう。…神の僕たちの経験したこともそれとよく似ています。時間の隔たりがかなりあり、わずかな光しか当たっていない時にある事柄を見たときは、不完全で不正確な見方をすることが少なくありませんでした。そうした状況の下で、わたしたちは以前持っていた見解に影響されていたかもしれません。しかし光が次第に明るくなり、種々の出来事が近づくにつれ、神の目的の遂行に関するわたしたちの理解はより明快なものになります。エホバの聖霊によって様々な預言に光が当てられ、…わたしたちにとって理解のできるものとなります。」

定番としてひんぱんに引用されるこの詩編 97：11 から、取りかかりましよう。

「光が義なる者のために、歓びが心の廉直な者たちのためにきらめいた。」（詩編 97:11）

新共同訳 1987

97:11 神に従う人のためには光を／心のまっすぐな人のためには喜びを／種蒔いてくださ

新改訳 1970

97:11 光は、正しい者のために、種のように蒔かれている。喜びは、心の直ぐな人のために。

口語訳 1955

97:11 光は正しい人のために現れ、喜びは心の正しい者のためにあらわれる。

直訳的には、「光は義のために種蒔く人のもの、心の喜びはまっすぐ（実直）な人のもの」という意味のようです。

「神からの光が油注がれた者たちにきらめいた」という表現が盛んに使われますが、新世界訳は相当に意識で、原語では「光、種まき、義人、実直、心、喜び」を意味するたった六つの単語で記されています。「きらめいた」に相当する語句は原語にはありません。

この句は、神が定められた「人の世の常」とも言うべき格言で、神が特定の目的を持って、義人に対して何かを働き掛けるという意味はありませんし、神による漸進的な導き、啓発、という意味は全くありません。

では次にもう一つ頻繁に引用される聖句も検討して見ましょう。

義なる者たちの道筋は、日が堅く立てられるまでいよいよ明るさを増してゆく輝く光のようだ。
(箴言 4:18)

新共同訳 1987

4:18 神に従う人の道は輝き出る光／進むほどに光は増し、真昼の輝きとなる。

新改訳 1970

4:18 義人の道は、あけぼのの光のようだ。いよいよ輝きを増して真昼となる。

口語訳 1955

4:18 正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる。

この聖句は、前後の文脈を見ると、悪人の道がどんな道かを述べて、その道を避けるように諭している言葉の途中に、対比のために語られている言葉です。

その意味も、その目的も明瞭で、何の説明も必要としません。

敢えて言えば、義人の道筋は、明け方から真昼に至る太陽の光のように明るく、その人は決してつまづくことがないと述べている聖句です。

聖書中によく見られる比喩で、暗闇につまづきはつきものとして語られます。

それで、逆に「光」は（明るい足下に何があるかよく分かるので）つまづくことがないという比喩として使われます。正しい人の人生は結果的に順調なものだというような意味でしょう。

この句に「導く」という意味は何も含まれていません。

「光」は、神が意図的に、義人だけに、特別に、理由があつて、当てているものではありません。

また、殊更に漸進的な神の働きという意味もありません。普通、朝方から昼にかけて「漸進的に」明るくなったなどという表現を使う人はいません。ご飯を食べたら「漸進的に」お腹がいっぱいになったなどと言わないのと同じです。

ましてや、聖書の理解や、預言の解明などということとは微塵も関係ありません。

この文が「正しい人を漸進的に導く」という意味ではないことは、小学校高学年くらいの読解力があれば、分かるでしょう。

ではさらに、知識が漸進的に増し加わることを示すと考えられている、もうひとつ別の聖句も考慮して見ましょう。

「今の所知識は部分的で、鏡にぼんやり映るようなもの」と述べるパウロの言葉はどうでしょうか。

「私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。(コリント第一 13:9 - 12 新改訳)

12節だけを、他の複数の翻訳と比較してみましょう。

新共同訳 1987

13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ています。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知るようになる。

前田訳 1978

13:12 今われらは鏡によってさだかならず見ていますが、かの時には顔と顔と相對するでしょう。今わたしの知るのは部分的ですが、かの時には(神に)知りつくされているように知りつくすでしょう。

新改訳 1970

13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

「現在わたしたちは金属の鏡でぼんやりした輪郭を見ていますが、その時には顔と顔を向かい合わせて見るのです。現在わたしが知っているのは部分的なことですが、その時には、自分が正確に知られているのと同じように、正確に知るようになります。」(コリント第一 13:12 新世界訳)

パウロは、知識は部分的で、「その時には正確に知る」と述べています。「その時」とはいつでしょうか。「正確に知る」とはどんな知り方なのでしょうか。

他の翻訳では「はっきりと知る、知り尽くす、完全に知る」などと訳しています。原語のギリシャ語には「正確に」とか「完全に」などに相当する単独の単語はありません。

ここで使われている「私が知られている《ように、同じように》」というこの《ように、同じように》という部分は「ギ語：カソス」という語で、同様に、同等に、という意味で、他の聖句でこの語は「その通りに、[言われた]通りに」と訳されており、分かり易く言うと「そのまんま」という意味の語のようです。

そういうわけで、パウロは、自分が神から知られている通りに（「顔と顔を向かい合わせる」ので）自分も神を知ることになる、と述べている分けですが、このように訳してしまうと、「神の知り方と同等の知り方で自分も神を知ることになる」という意味合いを伝えきれないと多くの翻訳者は考えたものと思われます。それで、知り尽くす、とか、完全、正確になどの語句が挿入されているのでしょう。

また、10 節の「完全なものが現れたら」という部分の「完全」（ギリ語：テレイオン）は「完全、完成、成熟、完璧」という意味の語句です。これが何を指すかは明確ではありません。勝手にこれを意味するものなどと決めつけるよりも、ここでは、「部分的」という語に対応する語として用いられているという認識に留めておきます。

しかし明らかなのは、それがいつの時点のどこでのことかは判ります。これは天に召された時のことであるのは明確です。

これらのことから、パウロが正確に知ると述べているのは、神ご自身のことであり、それはすでに霊の体を与えられて天に神と共にいる時のことだと言うことが判ります。

それまでは、神については（当時の金属製の）鏡で見るような「ぼんやり」した部分的な知り方しかできないということを述べているものです。

個人的な理解は、当然「徐々に」ですが、神が与えられる「理解、啓発」には、しかるべき時があり、大きな段階（ステップ）があることは確かです。

重ねて述べますが、神からの啓発が「漸進的」（スロープ）であるという前例は聖書中にはありません。

「漸進的」なのは「人間の理解」「人間の把握力」の方です。

もし、「ものみの塔」の聖書解釈、教理の変更が「漸進的」（実際は、「ああでもない、こうでもない」ランダム選択方式的ですが）であるとするなら、それこそ、神からの啓発など微塵もない、ただの「人間の理解」「人間のその場の思いつき」「人間の勤勉な研究やディスカッションによる発見」以外の何物でもないということを証明していると言えます。

さて、ではその神からの啓発タイミングについてですが、聖書中にはそのことに関しては「ただ一つの」出来事しか記録されていません。それはヨエルの預言の成就です。

この記事のテーマからはちょっと外れますが、最後にここに、決して漸進的ではない、むしろ突発的な神の啓発とその業についてしるしておくことにします。

「これは預言者ヨエルを通して言われた事柄です。『神は言われる、「そして終わりの日に、わたしは自分の霊の幾らかをあらゆるたぐいの肉なる者の上に注ぎ出し、あなた方の息子や娘たちは預言し、あなた方の若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。そして、わたしの男奴隷の上にも、女奴隷の上にも、わたしはその日に自分の霊を注ぎ出し、彼らは預言するであろう。またわたしは、上は天に異兆を、下は地にしるしを、血と火と煙の霧とを与える。エホバの大なる輝かしい日が到来する前に、太陽は闇に、月は血に変わるであろう。』（使徒 2:16 - 21)

これは、ペンテコステのときに成就した時の記述です。

しかし、啓示の書との関連からも明らかな通り、ヨエルの預言は、最終的には終末期に成就するもので、西暦一世紀の時を遥かに凌ぐ規模で行われる業です。また、それは、福音書の中でイエスが語られた「終わりのしるし」の中でも語られています。

「それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大なる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。」（マタイ 24:29 - 30)

この大々的な「預言」の業は、キリストの臨在の前に行われるもので、「そして、王国のこの良い

たよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられるでしょう。それから終わりが来るのです。」(マタイ 24：14)とされている出来事に匹敵するものです。

ところで、この時点でまだキリストは「戻って」はおられませんので、忠実で思慮深い奴隷の任命もまだ先の話です。

ペンテコステの時にも、それは決して漸進的などではなく「突然」起きました。それと同じように、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」が据えられると同時に、一気に始まります。その時の神の霊の働きは、誰か数人を導いて、記事を書かせ、印刷して配るといったような手間のかかる方法ではありません。息子、娘、若者、老人、男奴隷、女奴隷を含むあらゆる人々に、個々にダイレクトに聖霊が注がれ、彼らは預言します。神の業と言えるのはそのような出来事のはずです。

「王国のこの良いたよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられる」という預言は他の福音書の平行記述を読めば判るとおり、それは決して、こちらから出向いて家々を回るような方法でなされる業ではありません。迫害のさなか、当局に呼び出されて強制的にイヤでも語られる類の出来事になります。

「彼らに対する証しのため」に「地方法廷に引き渡され、総督や王たちの前に立たされる」と預言されています。

これが、「終わりの時」に行われる「あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられる」方法として聖書が実際に述べている方法です。これは神の目的の中でも、「終わり」の直前、とりわけ、支配階級層の人間に、ご自分の目的をダイレクトに告げ知らせる極めて重要な意味を持つ場面となります。

それゆえにこそ、その時は「あなた方が話しているのではなく、聖霊が話しているのです」と真実に言い得るものとなるのです。それは、二度と行われぬ、神の最後の特別の彼らに対する哀れみの手を差しのべる時でもあるのです。

そうした超特別の機会だからこそ、それまでにない仕方で「聖霊」が注がれることになるのです。ですから、「必ずしも、前もって証言の準備をしなくても良い」と言うより、そんなことはしないようにとルカの記述では言われています。

「人々はあなた方に手をかけて迫害し、あなた方を会堂や獄に引き渡し、あなた方はわたしの名のために王や総督たちの前に引き出されるでしょう。それはあなた方にとって証しの機会となるのです。それゆえ、どのように弁明するか前もってけいこなどしないことを心に定めなさい。わたしがあなた方に口と知恵を与えるからです。あなた方の反対者がみな一緒になっても、それに抵抗することも論ばくすることもできないでしょう。」(ルカ 21:12 - 15)

ですから、会話するための話題を前もって練習しておくとか、分かりやすく人の演じる実演を観察してシミュレーションしてみることは、必要ないどころか、そうした態度はむしろ、神の聖霊の働きを信頼していない不信仰の現れと見なされると言っても過言ではないでしょう。

とにかく聖書にはつきりとそう書かれているのですから。

(この点の詳細については「20 「良いたよりがまず宣べ伝えられねばならない」とはどういう意味ですか」をご覧ください。)